

【対談企画】今、再び音を重ねて ～あの青春の日々を振り返る～



第43回 大阪府吹奏楽コンクール 北摂地区大会

2004年8月3か5日
メイシアター

約20年前、まだスマートフォンもSNSも一般的ではなかった時代。高槻中高等学校吹奏楽部で青春を過ごしたOBが、時を超えて再びオンラインで顔を合わせました。当時の部活動の雰囲気、練習に明け暮れた日々、そして仲間との絆。彼らが語る「時代を切り取る青春ドキュメント」は、現役部員や若手OBOGの皆さんにも、きっと温かい共感と懐かしい発見を届けてくれるはずです。

今回登場するのは、梶山さん、馬場さん。同期として、同じ時間を過ごした二人が、どんな思い出を紐解いてくれるのでしょうか。

<対談者プロフィール>

梶山さん

高槻中・高等学校吹奏楽部17期の副部長。クラリネットパートを担当。卒業後は東京大学のオーケストラ部で引き続きクラリネットを続ける。現在は、某通信会社にて、社会イノベーションを実現する産官学連携ビジネスを担当している。

馬場さん

同じく17期のクラリネットパートリーダー。卒業後は音楽から離れ、大阪大学ではスノーボードサークルの会長として活動。現在は、同じく某通信会社にて将来ネットワークのR&D、北米留学を経て、環境領域における新規事業開発やグローバル市場へのビジネス展開を担当している。

インタビューー

NotebookLM / ChatGPT

【1】プロローグ：今、振り返るあの頃

インタビュアー：

今日はお集まりいただきありがとうございます。こうやってじっくり当時を振り返るのって、20年ぶりくらいになるんじゃないですか？

馬場：

たぶんそうですね。同期とオンラインで対談するなんて、不思議な感じです。

梶山：

ほんとに。今日の対談も、開始までいろいろありましたよね(笑)。普段使っていない会社のPCで、マウスが反応しなかったりして...改めてスマホ頼みの生活してるなって痛感しました。

インタビュアー：

まさに今回のテーマそのものですね。お二人が現役だったのは2000年代初頭くらい。当時の部活って、連絡手段も今と全然違っていたと思うんですけど、どうでしたか？

馬場：

スマホもLINEも、当然なかったですね。

梶山：

どうやって連絡してたっけ？って思い出せないくらいアナログでした。ガラケーは持ってたけど、全員にメールとかもそんなにしてなかった気がします。

馬場：

ね。10人以上いたクラリネットパートで、どうやって連絡回してたんだろうって、今思うと謎(笑)。

梶山：

たしか、ガラケー持ってない子もいて、その子のお母さんに連絡する...なんてこともあったような。でも毎日顔合わせてたから、そもそも連絡の必要があまりなかったのかも。

馬場：

「今日休みます」とかも、同期に伝えてもらったり、直接謝りに来てたよね。

梶山：

練習を録音するのも、スマホでポチッとなんてできなかった時代。

馬場：

MDプレイヤーだよね。専用マイク買って、MDに録音してた。録音用のMDって、ちょっと高かった気がする。

梶山：

録音対応のやつは、マイク挿す穴がついててゴツくてね。正直ダサかったけど、それしか選択肢なかった(笑)。銀色の、サイボーグ感あるやつ。

馬場：

うんうん。でも今見ると、あれはあれでメカっぽくてカッコよかったかも(笑)。

インタビュアー：

その音源って、どんなふうに使ってたんですか？

梶山：

コンクール前とかに録音をみんなで聴いて、演奏の確認してましたね。

馬場：

あれ、めっちゃ緊張したよね。部室にピリッとした空気流れて、先輩が途中で寝てたりしたのも懐かしい(笑)。

【2】部活の風景：汗と音で満ちていた日々

インタビューー：

この章では、当時の練習風景についてお聞きしたいと思います。「汗と音で満ちていた日々」というタイトルですが、実際のところ、練習環境はどうだったのでしょうか？

梶山：

正直、汗はあまりかいてなかったですね（笑）。冷房ガンガン効いてましたから。

馬場：

小講堂の扉を開けると、空調の気圧でカーテンがふわっと舞い上がって「ヒューツ」って音がするんですよ。それを聞くと、「あ、涼しい空間が待ってるな」って。

でも、椅子が狭かったり、机と一体型だったりで、楽器の出し入れはなかなか大変でした。

インタビューー：

日々の練習はどのように行われていたのですか？

梶山：

かなり練習してました。コンクール前だけじゃなくて、普段からわりと真面目にやっていた気がします。

馬場：

朝練もありましたよね。授業が始まる30分前くらいから。全員じゃないけど、10人近くは来てたんじゃないかな。

梶山：

昼練もあったね。2時間目が終わったあたりから早弁して、昼休みに吹くための準備をした（笑）。男子校だったから、遠慮もなく堂々と早弁できてたなって、今思うとちょっと面白い。

馬場：

そうそう、いい学校だったなって思うよ。

インタビューー：

朝練や昼練ではどんな練習をしていたんですか？

梶山：

基礎練習が中心でしたね。アルペジオとか音階とか、メトロノーム使ってしっかりやりました。

馬場：

メトロノームも今みたいなアプリじゃなくて、物理的に傾きを調整して使ってたよね。クリーニングペーパー挟んで、バランス取ったりしてさ。あれだけで5分くらいかかった（笑）。

インタビューー：

放課後の練習は、どのくらいの時間やっていたんですか？

馬場：

基本は18時半完全下校だったけど、昔は「先生が許す限りOK」みたいな感じで、7時、8時くらいまで残ってた記憶もあります。

梶山：

コンクール前や夏休みは、ほぼ毎日練習でしたよね。休みは一日もなかったかも。

馬場：

学校の「勉強合宿」とかも、吹奏楽部は行けなかったしね。

梶山：

でも、あれ行かないで残る組と、行く組でちょっとギスギスする空気もあったような（笑）。今思えば、部活が最優先だったんですよね。

馬場：

うん。どっちも大事なんだけど、当時は部活のことしか見えてなかった。

梶山：

そういう空気、今で言う「村社会」っぽいところがあったかもしれないですね。

インタビュアー：

顧問の先生や先輩との関係についてはどうでしたか？

梶山：

先生はずっと同じ方で、あたたかく見守ってくれてました。基本的に自由にやらせてもらって、本当にありがたかったです。

馬場：

「熱中するもよし、しないもよし」っていう雰囲気でしたよね。他の学校の吹奏楽部と比べても、自由で多様性があったと思います。

梶山：

先輩は...けっこう怖かったです(笑)。尊敬もしてたけど、やっぱりビビってたかな。

馬場：

でも、「こうなりたい」って思える存在がいたのは良かったよね。

梶山：

僕たちが上の学年になったとき、「クラリネットパートの雰囲気を良くしたい」って話になって、あえてふざけてみたりもしました。

馬場：

そうそう。パートの空気が怖かったから、それを少しでも和らげたかった。でも、それが良かったのかは今でもちょっとわからない(笑)。

インタビュアー：

吹奏楽部ならではの「あるある」や印象的な出来事って、何かありますか？

梶山：

クラリネットのリード、削りすぎてダメにしちゃうやつ、あれはあるあるでしたね。

馬場：

あと、先輩がクラリネットを全バラで掃除しようとして、元に戻せなくなった事件(笑)。

たしか演奏会の前日で、気合い入りすぎて逆に空回ったパターンでしたね。

梶山：

机の上にバラバラのクラリネットが転がってた光景、いまだに忘れられません(笑)。

馬場：

今だったらスマホで写真撮って、SNSに載せてたかもね。

【3】あの瞬間がすべてを変えた：挫折と成功が導いた「チャレンジ」の価値

インタビュアー：

部活生活の中で、特に印象深かった出来事や、それがご自身に与えた影響について教えてください。

馬場：

やっぱり一番印象に残っているのは、高校最後の夏のコンクールですね。

それまで高槻高校は「関西大会常連校」としての自信があったんですが、僕たちの代は、まさかの地区大会「銀賞」。しかも、過去最低評価でした。

梶山：

もう、ショックというより、「何が起きたの？」って感じでした。練習もそれなりにやっていたし、空気も悪くなかったと思っていたので、本当に理解できなくて…。

顧問の先生から「今年はちょっと難しいかも」みたいな話があったようなんですが、どこかで「自分たちは大丈夫だろう」って根拠のない自信があったんでしょうね。

結果を聞いたときは、後輩にも先輩にも、申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

馬場：

振り返ると、僕らの代の課題って、「全体が同じ方向を向けていなかった」ことだったと思います。真面目に練習しているグループと、そうでもないグループがあって、今ならそのギャップが大きかったと分かるんですが、当時はうまく噛み合っていなかったですね。彼らが何を思ってたのか、今になって聞いてみたいです。

梶山：

そのあと、アンサンブルコンテスト(アンコン)が控えていたんですが、正直、最初は出る気になれませんでした。でも、やっぱり「もう一回、何かにチャレンジしたい」という気持ちが湧いてきて。クラリネットパートには自信もあったので、「このメンバーならいけるかも」って、アンコン出場を決めました。

馬場：

出場メンバーは、2年生2人、1年生3人という構成。でも、選んだ曲が4人編成だったので、誰を出すか悩んだんですね。

部内選考は、投票で決めるという方法だったんですが、先生がそれを任せてくれたのも、すごいと思います。

梶山：

練習では、とにかく「音の質」にこだわって、ズレを徹底的に修正しました。後輩にも遠慮なく意見をもらったし、外部のプロの先生にも見てもらいました。

楽器を使わずにタイミングを合わせる練習をしたり、泊まり込みで合宿っぽく練習したり。とにかく「自分たちでできることを突き詰めよう」って、真剣でした。

馬場：

その結果、関西大会で「金賞」をもらうことができたんです。「ダメ金」(＝金賞だけど全国には行けない)だったんですが、審査員に近い方から「全国行けてもおかしくなかった」って言っていただいたのは、すごく嬉しかったです。

梶山：

あの経験は、人生で大きなギフトになりました。

「期待せずにチャレンジして、結果を出せた」っていうのは、自信になったし、「無謀でもやってみる価値がある」っていう価値観が生まれました。

今の仕事で新しい事業に挑戦するときも、「まずはやってみよう」っていうマインドにつながっている気がします。

馬場：

会社でのクリエイティブな仕事って、必ずしも「正解」があるわけじゃないですからね。

その中で「自分たちで考えて、自分たちなりの正解を作る」っていう経験が、高校時代にできたのは、本当に大きかったと思います。



【4】今だから言える本音：胸に秘めた思いと組織の課題

インタビュアー：

ここでは、「今だからこそ言えること」や、当時感じていた課題についてお聞きしたいと思います。特に、あのコンクールの結果を受けて見えてきたものもあったのではないのでしょうか。

馬場：

やっぱり一番の衝撃は、あの銀賞でしたよね。

当時は悔しいというより、正直「どうして？」って気持ちが大きかったです。でも今思えば、部全体が一つになれてなかったんだと思います。

梶山：

うん、僕らの代は、真面目にやってるグループとそうでもないグループに分かれていて…。

何を考えてたのか、今でも気になりますね。ちゃんと話せていたら、もう少し違ったかもしれません。

馬場：

あの頃、部内で本音をぶつけ合うみたいなことは、ほとんどなかった気がします。

特に楽器が違くと、遠慮して言えないことも多かったし、それぞれが「自分の正しさ」を持っていたから、ぶつかる場面もありました。

梶山：

トランペットパートと、本気でぶつかりかけたこともありましたよね。

普段は仲良かったのに、コンクール前の合奏になるとパートごとの温度差が出てきて、それが摩擦になっていました。

馬場：

上の代には「関西行こうぜ！」っていう明確な目標があったけど、僕たちの代ではそれが曖昧になっていたんですね。

もし本気で全国を目指すなら、部としてちゃんとビジョンを持つ必要があったなって、今なら思います。

梶山：

でも、当時はそういうことを言える空気じゃなかったんですよ。同期同士って、なんとなく横並びになりがちで、指摘したくてもできない。

これは社会に出てからも感じることです。

馬場：

うん。最高学年同士でうまく連携できていなかったのは事実ですね。価値観がバラバラで、それぞれがそれぞれの方向を向いてた。

梶山：

でも、コンクールが終わってから、みんなで集まって一晩過ごしたのは覚えてますか？

あの時に初めて、ようやく「ひとつになれた」ような感覚がありました。

馬場：

ありましたね。

もしああいう場をもっと早く設けていたら、関係性も変わっていたのかもしれない。

梶山：

運営も、もっと分担できたらよかったのかも。たとえば、「部長・副部長」とは別に、「音楽の質を追求する役職」を作って、コンクールに関してはその人がリードするとか。

馬場：

たしかに。音楽面でのリーダーがいれば、和気あいあい派とガチ勢の間でうまくバランスを取れたかもしれません。

今になって、組織のマネジメントってこういうことか、と気づきます。

梶山：

先生はちゃんと見てくれてたと思うんですけど、内部からもう少し役割分担があれば、また違ったかもしれませんね。

馬場：

あのときのしんどさって、人間関係の部分が大きかったかも。

先輩が怖かったし、部の空気も少しピリついていたからこそ、僕たちはクラリネットパートの雰囲気をもっと変えようと、あえてふざけたりしていました。

でもそれも、良かったのかどうかは今でもわかりません。

【5】吹奏楽部がくれたギフト／未来へのエール

インタビュアー：

最後に、吹奏楽部での経験が今の自分にとってどんな“ギフト”になっているか、そして後輩たちへのメッセージがあればお願いします。

梶山：

やっぱり大きかったのは、コンクールでの挫折と、アンサンブルでの成功を両方経験できたことですね。

特にアンコンで「期待せずにチャレンジして、結果が出た」という成功体験は、自分にとってすごく大きな財産です。

今の仕事でも「無謀でもやってみる価値はある」という姿勢につながっています。

馬場：

うん、目標を立てて頑張ることも大事だけど、同時に「自分たちでできることを突き詰める」という考え方も学べましたね。

今の会社ではそれがすぐに評価されるわけじゃないけど、事業開発とか新しいことを始める場面では、当時の経験が本当に役立ってるなと感じます。

梶山：

あと、部活って「小さな社会」だったと思うんです。

楽器ごとに文化も価値観も違う中で、合奏のときにバランスを取って、全体としてひとつの音楽を作るっていうのは、まさに社会そのもの。

中高の6年間（または5年間）を多世代の仲間と一緒に過ごすって、今思えばすごく貴重な経験でした。

馬場：

音楽が好きになったっていうのも、大きなギフトでしたね。

クラシックだけでなく、ジャズとかいろんなジャンルへの感受性が高まったし、何より「楽器は一生の趣味になる」と思えるようになった。

そして、今も一緒に思い出を語れる仲間がいるっていうのが、一番の財産かもしれません。

梶山：

後輩たちには、まず顧問の先生に感謝してほしいですね。僕たちは本当に自由にやらせてもらったし、それって他の学校にはない価値だったと思います。

あと、先輩方にもすごくお世話になりました。曲を書িয়েくれたり、楽器選びに付き合ってくれたり、演奏を見に来てアドバイスしてくれたり…。

クラリネットパートには本当にプロみたいな先輩が多くて、その背中を追いかけるのが刺激になってました。

馬場：

僕たちの代は、コンクールでは悔しい思いをしたけど、アンサンブルで挽回できたのは、後輩たちのおかげでもあります。

出場メンバーに選ばれなかった後輩も、すねることなく練習に参加してくれて、本当にありがたかったです。

梶山：

今の現役生は、SNSとかもあって、僕たちの時代とはまた違う楽しみ方をしてると思うけど、その分、バランスを取るのが難しいかもしれませんよね。

例えば、コンクールがない年度だと、どこに力を入れるべきか迷うこともあるかもしれません。

馬場：

だからこそ、OB・OGの存在をもっと活用してもらいたいなと思います。

僕らみたいなおじさん世代、けっこう世の中に散らばってるので(笑)、就職の相談でも、部活の運営でも、何か力になれることがあればいつでも声をかけてほしいです。

梶山：

昔は卒業生と話す機会って少なかったけど、今はSNSでつながりやすい時代ですよ。

「先輩に甘えていいんだ」って思ってもらえるような、風通しのいいOB・OGコミュニティをつくっていただけたらと思います。

馬場：

OB・OGが楽しそうに活動してる姿を現役にも見てもらって、「自分もあそこに行きたい」って思ってもらえる関係性が築けたら最高ですね。

吹奏楽部で得た経験とつながりって、人生のいろんな場面で生きる“ギフト”だと思うので、これからもこの絆を大切にしていきたいです。